

田中綱常から田中將軍への人神変質

—〈族群泯滅〉の民衆史学—

林 美容・三尾 裕子・劉 智豪
(五十嵐 真子訳)

はじめに

- 第1節 田中綱常の生涯と台湾との関係
- 第2節 〈抓乩〉、〈成神〉及び廟建立の経緯
- 第3節 田中大元帥の祭祀と行事
- 第4節 討論と結論：〈族群泯滅〉の民衆史学

(要約)

田中綱常 (1842 - 1903) と台湾との関わりは約 140 年前から始まる。田中は牡丹社事件の後、1873 年に台湾南部の地形実地調査に派遣され、1895 年に日本領台が始まると、すぐに澎湖列島行政庁長官や台北県知事に任命された。彼が台湾で植民地行政官であった時間は僅か 1、2 年という短いもの (1895-96 年) であったが、彼の死から 82 年ののち、その靈魂は屏東枋寮のひとりの女性に憑依した。彼女は 3 年間拒んだのち、彼の〈乩童〉¹ (依代、シャーマン) となり、〈靈通代言人〉 (靈魂とのコミュニケーションを行って、神靈の代弁者となる人、以下〈代言人〉) となって、廟を建立した。田中將軍の事例では、崇りではなく、〈抓乩〉 (靈魂が依り代を獲得すること) によって神が生まれた点に、特徴がある。また、この現象は田中綱常を祭祀する動きの高まりを引き起こしたのみでなく、一般の民衆による台日関係史のあるひとつのモデルの探索へと導いていった。すなわち、国家史学あるいは民族史学の立場のいずれも、台湾人が如何にして日本神を拜するのかを理解することはできず、ただ民衆史学の観点のみがこの事例の信仰行動と歴史行動について、さらに民衆の求める崇敬性は結局どこにあるのかを理解することができる。

はじめに

台湾の民間信仰の諸神にはその神となる過程におおむね次の 2 つの類型がある。まずひとつ目は国家あるいは人々に対して功があり、死後民衆が崇功報徳の觀念から祠を建て祀るものである。二つ目は正常でない死者である。人々はそれらが邪悪な鬼となって人に危害を加えることを恐れ、祭祀するようになる。前者はいわゆる〈正神〉、後者が〈陰神〉である。いわゆる先天神を除き、後天神は基本的にはすべて人が死後に神となったものである。〈正神〉と〈陰神〉² はその死亡の状態により、それらに対して人々が祭祀を行う心情は大きく異なり、祭祀の方式にも違いがある。

この 2 年来の第 1 筆者 (以下、「筆者」) と第 2 筆者の研究計画は、日本人が死後台湾で神となった事例を共に調査し、いわゆる「日本神」とその信仰の現状に対して人類学的解釈の提示を試みるものである。「日本神」とは本論では生前日本人であった神をカテゴライズする分析用語として使用する³。この調査研究は、始めて見ると、我々の興味をますますかき立てた。我々の全般的な調査は現在のところ一段落が付き、その信仰や祭祀状況の細部調査へと継続して研究を進めている。今回は、我々が調査した 40 数件の日本人の神の事例の中から、田中將軍 (田中元帥、田中大元帥ともいう) について進行している研究を選び、記述することとした。田中將軍を選択

した理由は、彼が大変有名な田中綱常（1942 - 1903）で、歴史上の人物であるため関係する史料も比較的多く、台湾史研究者も知っているはずだからである。さらにもうひとつの理由として、日本神の事例のなかで、〈抓乩成神〉（依代を獲得し、神になること）の類型が他にほとんどないということである。多くの事例は死後に人々に崇りを及ぼすことを契機に祀られている。例えば、台南市後甲慶隆廟の吉原元帥は、骨が掘り出されたのちに崇りを及ぼしてから神になった。それゆえ、田中將軍のように高位の植民地官僚が、死後依り代を獲得して神になる事例は、特に検討する価値があると思われるのである⁴。

田中綱常と台湾と関わりは約140年前から始まる。田中は牡丹社事件（日本では台湾出兵、あるいは台湾の役、台湾征伐とも呼ばれる）の後、1873年に台湾南部の地形実地調査に派遣され、1895年に日本領台が始まると、すぐに澎湖列島行政庁長官と台北県知事に任命された。当時、彼は、海軍少将であった。彼が台湾で植民地行政官であった時間は僅か1、2年という短いものであったが、彼の死から82年ののち、その靈魂は屏東枋寮のひとりの女性に憑依した。彼女は3年間拒んだのち、彼の〈乩童〉となり、〈代言人〉となって、廟を建立した。この現象は田中綱常を祭祀する動きの高まりを引き起こしたのみでなく、一般の民衆による台日関係史のあるひとつのモデルの探索へと導いていった。

本文ではまず田中綱常の生涯について詳述し⁵、彼の生前二度に及ぶ台湾との因縁について、そして田中將軍靈の〈抓乩〉（靈魂が依り代を獲得すること）と〈成神〉（神になること）の過程について述べる。特に強調したいのは、田中將軍の〈代言人〉である石宮主のこれらの過程での経験、田中將軍の廟である枋寮東龍宮と基隆分堂についての説明、田中將軍に関する祭祀活動、及び行事における主要な信仰方式などについてである。そして、最後の討論部分において重要なのは次の点である。ある日本神へのこのような崇拜や信仰はいかなる民族、国家とも無関係な、一種の民衆による台湾の過去と日本との関係への自動自発的な探索で、そこから導きだされるのは今日の台日民衆の信仰文化上の交流である。

第1節 田中綱常の生涯と台湾との関係

田中綱常は1842年11月21日生まれ、1903年3月25日没、享年61歳だった。彼は19世紀の人物であり、その一生は明治時代の歴史を目撃した。当にその生命の尽きるとき、明治時代は未だ幕を閉じていなかったが、日本帝国はすでに彼のような中堅の人々によって支えられ、東アジアで勢いよく勃興していた。我々は彼の一生の履歴から、彼が若くして漢籍を学び、国家によって育てられたことを見ることができる。彼が29歳のときすなわち明治4年、清国に漢文学習に派遣された。これは明治になって以降の第一期留学生で水野遵⁶らと同期である。田中綱常は漢文にかなりの造詣があったため、後に牡丹社事件が発生すると台湾の地形実地調査に派遣され、台湾攻略を準備し、陸軍の任につき実際に討伐に参加するに至った（図1参照）。また、日本と清国との交渉においても協力して事にあたった。田中綱常の一生と牡丹社事件は深く結ばれており、事件の処理後、牡丹社事件で死亡した軍人軍属の遺骨が元は長崎市梅香崎にあったがこれら

を長崎市佐古に遷葬し、招魂社を建立した。現在ここには移葬碑があり、田中綱常は条石⁷委員に名を連ねている。

田中綱常の一生を総じてみると、彼は大器晩成といえる。29歳のときに清国へ留学生として派遣され、これが彼の人生の重要な転機となった。また、この年軍職にも就き、軍においても一歩一歩昇進し、陸軍中尉から大尉となった。その後海軍へと転任し、海軍少尉から少将まで昇進している。彼が将官の任に就いたのは51歳のときで、58歳で退役するまでの29年間、南征北伐の軍隊生涯を過ごした。内乱討伐時は、戊辰戦争、西南戦争など、明治維新後に引き起こされた内乱の多くに彼の討伐に参加する姿があった。田中は国外の征討にも赴き、まずは牡丹社事件、後には壬午軍乱（事変）にも関わった。彼はこうした経緯から明治開国以来の国家を担う良将に緊密に関係し従うことになった。例を挙げると台湾総督府第一代総督の樺山資紀⁸（1837 - 1922）である。1873年に樺山が陸軍少佐であったとき、田中は歩兵大隊長で視察員に任ぜられ、樺山などに付き添って北平（北京）、天津、上海、台湾、そして清国を渡り歩き、牡丹社事件紛争の解決策を探し求めた。1874年5月田中綱常は陸軍少将・谷干城⁹（1837 - 1911）と台湾牡丹社の討伐に参戦した。同年7月台湾蕃地事務官都督海軍中將・西郷従道とともに再度台湾に赴いた。西郷従道に知己を得、また同じ鹿児島人であっ



氏常綱中田故の頃年八治明

図1

明治8年の田中綱常、当時33歳で、このとき陸軍任官。資料出典：藤崎濟之助(1928)。写真提供：李光立。

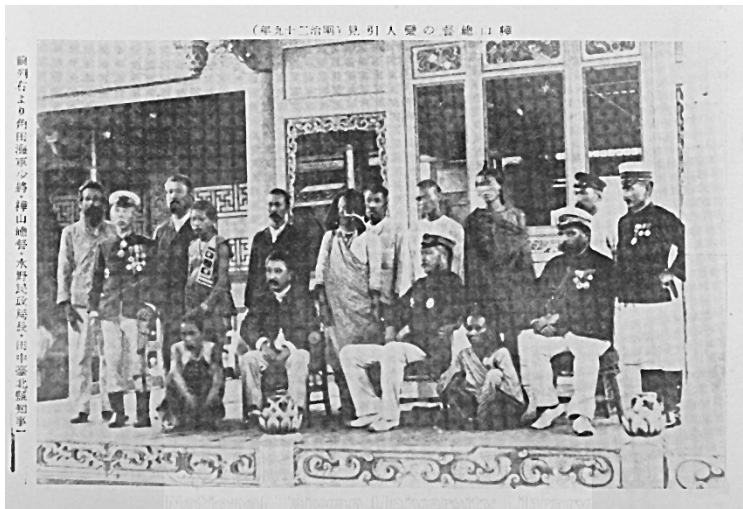


図2

1896年の田中綱常。前列左に立っている。当時は台北県知事で、着用しているのは海軍少将の軍服と思われる。写真向かって左に座っているのは水野遵民政長官、中央が樺山資紀総督で、この写真は樺山総督が台湾原住民を見引したときに撮影。資料出典：安藤元節編（1932）。写真提供：李光立。

たことは、2年後田中が陸軍から海軍へ転身する鍵となった。

田中綱常と台湾との関係を詳しくみるならば、第1段階として牡丹社事件より始めることができる。1871年琉球宮古島の漁民が台湾に漂流し、牡丹社のパイワン人(当時は大耳人と呼ばれた)に殺害され、これによって日本が戦端を開いた。1873年田中綱常は陸軍歩兵第17大隊長(階級は陸軍大尉)の任に就き、視察員に任ぜられた。3月には樺山などとともに清国へ赴き、8月にははじめて台湾に渡り淡水と打狗(現・高雄)などの地を視察した。1874年2月田中綱常は台湾討伐の準備のため、台湾の地形調査に派遣された。これが2回目の台湾への渡航となる。同年5月谷干城に随同し正式に台湾牡丹社討伐軍に参加した。これが3回目の台湾である。田中綱常は同年には日本代表の清国での交渉に協力し、そののち代表のひとりである大久保利通と台湾実地調査を行った。これが4回目の台湾である。このように1874年は田中綱常が集中して台湾を訪問した時期といえる。牡丹社事件の功績により、田中は1876年に、日本政府が日本が関わった戦役や事変で功績のあった人に授与する「従軍記章」を受け、並びに1878年には牡丹社事件と西南の役の討伐に対して勲五等が叙勲された。1881年に田中は長崎県の戦死者墓地改葬委員に任じられ、牡丹社事件の軍人軍属の遺骨を長崎市の佐古招魂社に安置する処理を行った。牡丹社事件はこうして区切りがついた。このように、田中は最初から最後までこれに関わった。田中は台湾が正式に日本の植民地となる以前から牡丹社事件を契機に数回台湾に渡っている。牡丹社事件こそが当時の日本帝国による台湾願望の始まりで、田中はその先発部隊の一角を務めた。これが彼の台湾との接触の始まりである。こうした人物が如何にして台湾人がひれ伏して拜む田中將軍と成りえるのだろうか。

田中綱常の台湾との深い因縁の第2段階は、甲午戦争(日清戦争)の後である。1895年に台湾は割譲となるが、日本と



図3

東京の田中家の墓。田中綱常とその妻女がここに埋骨されている。

写真提供：2016年5月24日三尾裕子撮影

清国が海上にいてまだ公文書を交換していなかった1895年2月、53歳の田中綱常はすでに海軍少将に任官し、海軍大臣西郷従道の命を受け、800余名を率いて澎湖列島に進み、3月連合艦隊司令長官海軍中将伊東祐亨の命を受け、澎湖列島に行政庁を設立し、長官になった（馬関条約（下関条約）によって台湾が清国から日本に割譲されたのは、4月17日）。さらに6月には台北県知事に転任した。1896年4月田中は台湾総督府民政局事務官に、そして9月には天皇より貴族院議員に任ぜられ台湾を離れた。1895年2月から1896年8月前後の1年半は、田中綱常の第2回目の台湾との因縁で、高位の植民地官僚に任じられた（図2参照）前回の牡丹社事件と同様に、田中が集中的に台湾に渡り職に就いている時間はともに短く、僅か1、2年であった。

しかし不思議なのは田中綱常が1903年に死去し（その墓は図3）、82年もの歳月が経過した後、彼は思いがけずに台湾人が信奉する神へと変身し、田中の台湾との因縁の第3段階を切り開いた。この現象のそもそもの発端と彼が自ら霊として現れ（抓乩）したことは、石宮主というひとりの女性（乩童）に彼の廟を建立させ、行事（儀礼や信徒の相談事の解決などを行うセアンス）を行わせたことと非常に密接に関係している。彼は台湾人が奉祀する神となり、田中將軍あるいは田中大元帥と呼ばれているが、將軍は彼の生前の職称であり、台湾では男性神の名称のひとつでもある。1985年に田中が神となって現在すでに30年が経過している。今回の田中將軍と台湾の縁は収束することのない、切れることのない因縁である。

第2節 〈抓乩〉、〈成神〉及び廟建立の経緯

田中綱常が台湾屏東枋寮東龍宮と基隆分堂の主神となり、信者衆の信仰を受けることになった重要な鍵は現在の東龍宮宮主の石羅界道長である（羅界は彼女の道号で、本名は石界好、金順という名もある。以下は石宮主とする）。彼女が28歳のとき田中綱常の霊が突然彼女を探し出した。彼女がちょうど眠っていて、半ば眠っているような目覚めているような状態のとき、突然軍服を着た人物が走ってきて話し始めた。しかし彼女は少しも聞き取ることができなかった。この人物はおそらく日本語で話していたようである。そのときの彼女の身体感覚は押しえつけられているようであったと形容する。これが田中の霊が憑霊した第1回目のときで、完全に意識を失っていたが、その最中には多くのことが行われ、田中も多くのことを話した。目覚めたのち再び意識を失い、再度目覚めたのち夫がたった今発生した状況を説明した。彼女が感じたのは田中將軍への畏れで、二度と彼に憑霊されたくなかった。翌日の午後、彼女が店舗（当時は夫と共にタクシー業を営んでいた）にて昼寝をしていた時、昨夜の軍人がまた夢の中に出現した。このときは通訳を1名伴っていたので、この將軍の話の意味を理解することができた。田中將軍は開口一番、「28年間もの間探していた」と告げた。彼女が母親の胎内から出たときから田中はすでに彼女を探していたのだろうか。更に奇怪なこととして石宮主自身が次のことを筆者に語った。彼女が10代のころからずっと見続けていた夢が、13年もの間見ていたにもかかわらず、田中將軍の霊と出会ったのちに見ることがなくなった、という。彼女が語る夢のなかで、彼女は8、9歳の和服を着た男の子で大きな邸宅にいる。建物の屋根の角には鳥衾と獅子口がひとつずつあり、庭



図 4

山口県常栄寺の雪舟亭

（資料出典：<http://anny3805201314.pixnet.net/blog/post/170453967>，最終閲覧月日 2016 年 3 月 7 日）

には桜の木があることをはっきり見ることができた。大きなホールにいる大人は何かの会議で討論をしているため、誰も入ることはできない。いたずらなその少年は桜の木に登って探ってみようとするが、ある老婦人に降ろされた。少ししてからまた上ってみたところ、着物の帯がほどけてしまい、彼女は夢のなかで「おばあちゃん」と叫び、その声を聴きながら目を覚ましたという夢である。石宮主がのちに田中綱常の来歴の調査で日本と関わっていくうちに、山口県常栄寺の雪舟亭（図 4 参照）にて、その建物の形がかつて見た夢の記憶と酷似していることがわかった。このことは彼女の前世と田中が山口県で何らかの因縁があることを意味しているようで、石宮主は自分はその前世において田中將軍が完成しようとする大業を助けることを承諾していたが、今だ履行していないため、今世で彼のために依代となり、彼のために働くのだと話す。

石宮主は 28 歳のときの出来事を次のように回想する。彼女は枋寮山上の蝙蝠洞で蜜柑色をした蝙蝠¹⁰を見た。その 9 日後、田中將軍の霊と出会いが始まった。当時は乃木希典、北川直征、さらに田中に生前付き添っていた中山奇美と良山秋子の 2 名の看護師の霊も彼女に憑霊した。彼女は 20 数日毎日蝙蝠洞で静坐したが、これらの日本の靈魂がみな彼女に憑依し、彼女にいくつかのことを教えた（これは彼女の第 1 の〈受禁〉（世俗を離れて籠って修行すること）である）。しかし一体どうしてこうしたことに彼女に関わらなければならないのだろうか。その後 3 年間は、まさに不断の憑霊とその拒絶の期間であった。彼女はもともと無神論者でこうした事柄の発生については排斥したかったが、しかし田中將軍はしばしば現れ、さらに別人にも夢を託し、4 人の人物が彼女を探しに家にやってきて、彼女に処理を頼みたい難事があることを説明した。田中將

軍が現れる夜は落ち着かず、体の具合も悪くなるが、検査をしても原因はわからない。しかし憑霊時には奇怪なことを話し、精神はバラバラになって崩壊し、夫はもう少しで彼女を精神病院へ送るところであった。石宮主は次のように回想する。彼女の9か月間の人生は真っ暗で、まるでちょっとぼおっとしているような、ちょっと病気にかかっているような状態であった。彼女は近所の五府王爺に助けを求めた。王爺は彼女が神の〈代言人〉となるように運命が定められていると話したが、それでも彼女は拒絶した。彼女の拒絶の仕方は、まず田中將軍を罵倒し日本へ帰れと叫び、さらに仏教の道場にて受戒した。こうなれば田中將軍が彼女の身に再び現れることはもうできないと考えた。しかし田中將軍も彼女とともに受戒したため¹¹、この方法は失敗した。彼女がこのように何度もわたって田中將軍が彼女に神託の代言を求めても拒絶し、ありのままにこれを伝達することもしなかったため、田中將軍はその都度処罰したが、のちに失望して離れていった。しかし次々に様々なことが発生し、石宮主はほとんど発狂寸前になり、夫もどうすることもできず、再び五府王爺のもとへ向かった。王爺は例の神はすでに去ったが、彼女のもとに戻ってくることはまだ可能なので、蝙蝠洞に行きそこに香炉をおいて彼を求めるようにと語った。こののち石宮主は田中將軍を〈主公〉(主人)とすることを正式に受け入れた。しかし、こうした三年間の駆け引きの後に最後に受け入れたのは、石宮主本人のもうひとつ別の理由があったからである。というのも、当時彼女は田中將軍と知らないうちに三つの条件¹²を話したのだが、それらをひとつずつ実行してしまったので、それ以降、彼女は田中將軍の依代と正式にならないわけにはいかなかったのだ。

石宮主が30歳のとき、田中將軍が家の入口に祭壇を置き、〈桶盤〉(円形の盆)を手に捧げ持ち、東を向いて跪拝するように指示した。11月ぐらいであった。石宮主はそれを疑わず、早朝から跪拝していると、午前6時ぐらいに背が高く体の大きい髭を蓄えた立派な男性が、ご飯の残り物を携えて彼女の家を入口を過ぎた。彼女がちょうど跪拝し頭を上げようとしたとき、その人物が車から降りてきて彼女が何をしているのか尋ねた。彼女は〈領旨〉¹³するところであると説明したが、そのとき彼女は〈領旨〉が何かを知らなかった。「おおそうか! 〈領旨〉か!」とその人物は言い、その後手で彼女の〈桶盤〉に少し触れた。石宮主は手が汚れるので触らないようにとすぐに言った。午前10時過ぎ、石宮主は〈金紙〉(神や靈魂のために供物とする金銭など、紙で作った供物)を売る店に行くと、店にいた人物が白鶴童子に送る〈旨〉について話しあっていた。その夜、芝居のなかで天官賜福を演じるときに着るような衣服を着た人物が彼女を両手で迎えている夢をみた。その後黄金の綿ネルの布が降りてきて、その布には「東龍宮」と書かれていて、彼女は夢中で手を伸ばした。翌日再び〈金紙〉店で確認すると、これは民間の廟の〈領旨〉の知らせで、〈天庭〉(天上の神の宮殿)より直接官吏が派遣されたのだということだけがわかった。

石宮主はこれによって専門の宗教職能者となり、まず田中將軍の霊と意思疎通を行った。枋寮蝙蝠洞で20数日間〈受禁〉しただけではなく、その後自宅の祭壇のもつて49日間〈禁〉を受けた。1998年に東龍宮が落成する前に、廟の前に組み立てられた〈禁壇〉にて再び49日間の〈禁〉を受けた。このときは彼女の師匠である(故)林徳勝道長が助力した。〈禁〉を受けている大部分の時間は座して神の話しを聞いた。〈受禁〉では毎回田中將軍が神意について集中的に彼女に教授、

伝達することがほとんどであった。最初の段階では田中將軍は文書を書く方法で神意を伝えていた。しかしあるとき石宮主が〈訓乩〉（童乩になる訓練）の最中に、突然祭壇上の聖符水を飲んだ。この儀式を経験したのちは口頭で田中將軍の神意を伝える方法を開始した。

石宮主は35歳のときに師に拜して道を学び、〈登刀梯奏職〉（道士が刀でできた梯子を登り、頂上で神を許可を得て道長を継承する儀礼）を行い、林徳勝道長を師として、正式に靈宝派道長となった。女性の道長は台湾では多く見ることはない。彼女にはもうひとりの師が台北木柵にあったがすでに亡くなっている。その師は閩山派の法師で、祖師は徐甲真人であったので、彼女は徐甲派も受け継いでおり、その師から〈鳳陽法〉¹⁴を学んだ。この術をなす人は少ないという。筆者は彼女に、神の〈乩童〉は神のために事を行うので十分なのに、なぜ彼女は道や法を学ぶのかと尋ねた。彼女は〈乩童〉はただ神が憑依したときのみ神として事を成すことができるが、しかし信徒はそれぞれに事情があり、信徒の求めに応えるためには多くの道法を学んでいなければ全面的に信徒のニーズに応えることは困難となる、と語った。しかし実際には石宮主はすでに田中將軍などの神々と通じることができたので、時にはセアンスのときには〈通靈〉する（憑霊ではなく、神と彼女がコミュニケーションをする）やり方を行っていた。

なお、田中將軍の来歴に関しては、東龍宮の「東龍宮田中將軍沿革由来」に次のように刻まれている。

「田中將軍は清朝時代の人物で、日本の神戸に住み、姓は田中、名は滬都である。当時は日本の軍事機関の特務員で、階級は現在の少将と同等であった。…同治13年（1874年）日本当局が台湾の政治情勢や状況を把握するために、田中滬都氏を23名の特務員のリーダーとして派遣した。日本から瑯嶠を経て、射寮（現在の車城郷射寮村）に上陸し、手探りで調査した。田中一行は正確に状況を把握したのち、日本へと報告のため戻った。日本当局は時期が熟したと考え、陸軍中將西郷従道を台湾番地事務総督に任じ、陸軍少将谷干城、海軍少将赤松則好らを軍に加えた。陸軍少佐佐久間左馬太、海軍少佐福島九城を参謀に、大蔵卿大隈重信を台湾番地事務局長に任じ、大部隊に田中一行が援護し、再び日本より車城へ上陸し、正式に台湾に入り番地の討伐を行った。田中は先頭で率いていたために不幸にも枋寮にて死亡した」¹⁵。

この沿革資料は廟建立初期にあった神諭に基づいて石宮主の長男の史料考証の下で記載された。現在、石宮主の長男の説明によると、滬都は田中の軍務執行期の変名¹⁶であり、当初神は自分のことを田中滬都というのみだったが、のちになって東港東隆宮の前の董事長の息子である林文隆氏が石宮主に、牡丹社事件と関係する田中は、田中綱常に違いないと知らせたという。その後、石宮主は神に確認を取り、確かに田中綱常であることが分かった。そして、石宮主は田中綱常に関連する史料を集め始め、田中の子孫とのつながりをつけていった。なお、枋寮で死亡したのは田中ではなく田中の部下であった北川直征であるという。しかしこの資料からも分かるように、田中將軍の廟が正式に建立されていたとしても、その時はまだ田中の本名（フルネーム）はまだ完全には解っていなかったのである。しかし、彼が牡丹社事件の前にすでに台湾の軍事情報員であったことは解っていた。

枋寮東龍宮は1996年2月に土地を購入し建立をはじめ、1998年に落成し、4000万新台湾ド

ル余りの費用がかかった。安座時には三朝（足掛け五日間）の〈祈安清醮〉（神の加護に感謝し、地域の平安、五穀豊穡などを祈る道教の儀礼）を、2002年に再度五朝（足掛け七日間）の〈祈安清醮〉を挙行し、どちらも林徳勝道長に儀礼の執り行いを依頼した。現在の枋寮東龍宮は田中將軍を主神とし、乃木希典將軍、北川直征將軍、中山奇美と良山秋子の看護師2名を脇に祀っている（図5参照）。左右には福德正神と註生娘娘、正面前方には中壇元帥を祀っている。東龍宮の左側には一艘の中国式の神艦¹⁷があり、右側には生前の田中將軍の騎馬像がある。〈神龕〉（神像を安置する箱、台）の前には四角の机と5個の椅子があり、ここは田中將軍が客と会う場所であるが、一般的な王爺の廟の配置と変わらない。机の上には清酒、日本の緑茶、香炉などがあり、これは一般的な設置物といささか違いがある。東龍宮には20数名の管理委員があり、平時は2名の〈廟公〉（廟守）が交代で廟にて服務にあたる。基隆分堂は実際には枋寮に廟が建立される前に石宮主の住宅に設置されている。石宮主はすでに基隆に移住していたが、しかし田中將軍が枋寮に廟を置くことを選んだため、石宮主は南北を奔走して信徒への対応にあっている。総じて述べれば次のようになる。田中綱常はその死から82年後の1985年に石宮主を依代とするために探し出したが、3年間の抵抗とせめぎあいを経て、まずは枋寮の自宅に田中將軍の祭壇を開き行事を始めた。石宮主は後に基隆に移転し自宅で祭壇を開き同時に両方にて行事を行った。枋寮東龍宮を1998年に建立したのちは枋寮の自宅の祭壇は再開せず、南部での行事は東龍宮へと改めた。石宮主は2016年現在55歳である。これまでのところ、彼女はすでに20年以上にわたって信徒のための服務をこなしており、まもなく30年近くとなる。

枋寮東龍宮の建立はその建築様式、装飾配置、副祀される神に至るまですべて田中將軍の指示



図5
枋寮東龍宮正殿所奉祀神明 写真提供：李光立

に依っている。現在の東龍宮は2階建てとなっている。もともとは1階の正面に階段があり、直接2階へ上がることができたが、2015年に拝亭が増築されたため正面の階段が取り壊され、側面から上がるように改装された（図6参照）。1階は田中將軍関係資料の展示室に改装中であると、石宮主の長男は語った。東龍宮の建設については田中將軍が早くから、李・林・肅・羅の四つの姓の人物が中心となって完成させると明言している。林は高雄屏東地区では裕福で名声のある林徳勝道長をさしていると石宮主は言う。彼は田中將軍が石宮主に師事し道を学ぶ相手として指示し、東龍宮の木材は彼に購入を依頼した。李は石宮主の夫である李氏（故人）であり、羅は羅傑建設会社の社長で、彼は1千万新台幣ドルを廟建設に寄付した。肅姓の人物は今のところ現れておらず、誰をさすのかはまだわからないと石宮主は述べた。



図6
屏東県枋寮東龍宮 写真提供：李光立。

第3節 田中大元帥の祭祀と行事

枋寮東龍宮は田中將軍の殿堂であり、基隆にも分堂がひとつある。両所は共に田中將軍の祭祀場所であり、田中將軍が活動する場所である。基隆分堂はある社区入口の右側にあり、階段を登って上がるようになっている。東龍宮は地域の公廟ではないので、地域的な祭典は行わない。田中將軍の聖誕は農曆4月8日に定められており、ちょうど仏教の仏誕日、浴仏節にあた

る。2016年の聖誕では屏東枋寮で〈巡境〉(神輿の練り歩き)に出る計画が準備された。田中將軍の部下、北川直征の霊も2016年3月20日に彼の子孫と石宮主らによって長崎の墓から枋寮東龍宮へ連れ帰った。東龍宮は私廟の性質を持つので、その行事は信徒へのサービスを行うのが中心で、その靈験事蹟は非常に多い。日本の道教学者山田明広が道教の靈寶派の研究で台湾を訪れたとき、東龍宮を参拝した。田中將軍は石宮主による〈通靈〉の方式で、山田氏に東龍宮の弟子が鹿兒島でルーツを探すことを助けてほしいという希望を伝え、また將軍は彼の博士論文完成の願いをひそかに助けた。その後、石宮主は山田氏の協力に非常に感謝し、田中將軍の鹿兒島でのルーツ探しの願いをかなえ、東龍宮内には現在、鹿兒島黎明館から取り寄せた歴史資料が掛かっている。

毎年年末の時期になると、石宮主はとりわけ忙しい。2016年2月初めの旧暦年末には筆者と第3筆者は基隆分堂で石宮主が信徒に替って〈安太歳〉(毎年、その年の十二支と同じ方位に宿る神で、同じ干支とその反対の位置にあたる6年後の干支の生まれ年の人は厄払いをする)と〈刈鬮〉¹⁸(一種の改運儀礼)を行う状況を調査した。このときに筆者は初めて台湾の女性道長が道袍を身に纏って信徒に儀礼を行うのを目撃した。儀式は全体で30分ほどであった。石宮主の(科儀)(道教の儀礼で用いる経典、またその儀礼)を唱える声は非常に大きくて明瞭である。その日ある女性信徒は一家を代表して〈安太歳〉と〈刈鬮〉にやってきたが、儀式が終わり、紙銭を焼いた後に、台北から来たこの信徒が乗ってきた車に行って彼女が購入したいと考えている家の図面を持ち出し、購入すべきがどうかについて石宮主に尋ねた。このとき石宮主はすでに道袍は脱いでいて、純粋に五行易理を用いてこの家をもし買うのなら風水に注意しなければならない問題について解説をした。

2016年2月末筆者は枋寮東龍宮で〈栽花換斗〉の儀式を観察した。これは結婚後数年経つのにまだ子供のない夫婦のために挙行された出産を願う儀式で、時間は一時間半程度であった。廟に向かって拝亭に三層の机を置き、机の左前方に橋を設置する。石宮主は道袍(文服)を着て、まず殿内で神を招き、疏文を読み、それを燃やした後、武服に着替え〈栽花換斗〉の〈科儀〉を主導した。正月から十二月、さらに潤月も加えて、毎月註生娘娘に植え付けがうまく行くようお願いし、花を咲かせる。石宮主はひと月ひと月と唱唸する。儀式の後、信徒は供物机の上の註生娘娘が水を撒いた盆栽を家に持ち帰って世話をする。さらにベッドの頭の方に護符を置く。石宮主は妻の実家に豚の胃袋とハスの実を煮て妻に食べさせるように要請した。その後筆者が訪問した時、石宮主はこうした儀式をすでに何度も行って、息子の妻も〈栽花換斗〉の儀式によって懐妊し、現在2人の娘がいると話した。またこの村のある信徒が〈栽花換斗〉の儀式を行ったが、その後まもなく石宮主は夢である人が一対の嬰兒を彼女に見せるのを見た。二人の性別ははっきりとはわからなかった。翌日信徒の母親がすぐに参拝にやってきたので、彼女の娘は妊娠していることを石宮主は告げた。そして娘に彼女に高い靴を履いたり、自転車にのったりしてはいけないなど妊婦が避けなければいけないことを伝えた。結局彼らには本当に双子が生まれ、どちらも男子だったが、片方は女子っぽく見えた。夢のなかで石宮主がはっきりと見ることは、田中將軍が常に石宮主とやりとりをするパイプがあるからであり、石宮主は神の意志を

理解することができる。

第4節 討論と結論：〈族群泯滅〉¹⁹の民衆史学

漢人のコスモロジーにおいては、人は死後鬼となるが、子孫が祭祀者となればそれぞれの家族の祖先となる。功德のあった人は、それが国家に対してであれ民衆に対してであれ、神となり廟が建立され、さらに祭祀が行われる。祭祀されない孤魂についても、〈祭厲〉（無縁仏に対する祭り）や塚に集めて祠を建てて祀る民間慣習がある。祠を建てる行為（enshrine）を経過することで、無祀から有祀へと変化し、人間世界の社会的セーフティネット及び民心の安定に大きな作用をもたらすことになる（Jordan 1972, 渡邊 1991 など）。田中綱常が神と成り、田中將軍（元帥）に変化する事例を検討してみると、彼は死後鬼となったのではなく、また〈祭厲〉の慣習によったものでもなく、ただ単純に死後神と成ったのである。民間祭祀の多くの神明には中国歴代王朝の歴史的人物が少なくないが、それは生前に功德があったことから後の人々が崇功報徳の心理から祭祀を行っているのである。こうしたことから、田中の事例の特殊性は、彼が生前日本人の身分であったことにある。

漢人が漢人以外の人物を死後神とし祭祀を行うことは決して前例がないわけではない。台湾に関して言えば、屏東墾丁にある八寶公主を祀る廟は、オランダ時代の皇女を祭祀しているとされている。但しこれは明らかに陰廟で田中將軍を〈正神〉とする東龍宮とは同じではない。我々が研究対象としている日本神の事例の多くも、台湾で死去した日本人が崇りを及ぼして崇拜を求める状況がある。このような状況で建立された廟は八寶公主と同様であり、陰廟に属する。

我々がもし田中綱常がいかにして神となり田中元帥になったのか、日本人としての田中あるいは日本文化という側面からを探るとしたら、つまり、なぜひとりの日本人が死後その霊が〈抓乩〉し神となったのかを問うとしたら、解答に至ることは決してない。なぜなら日本には神が〈乩童〉に憑霊する文化が希薄だからである。日本の英雄豪傑や文人官僚が死後神となることはあり、菅原道真がそのわかり易い例である。ただし菅原道真は〈抓乩〉によって神になったのではなく、怨霊としての性質が強く、彼は有能ながら九州に流された文人官僚で死後霊となり広く民衆から崇拜された例である。しかし田中將軍は怨霊ではない。日本人が死後神となり台湾で祀られている事例のなかでよく見られる類型は、戦争中に正常ではない死に方をした一群の日本人の亡霊の崇りがまず先にあり、人間や家畜に災いあるいはその懸念を引き起こし、祀られることを要求し、それが成功するパターンである。こうした例は台南地域に発生することが特に多い。ただし田中將軍の例は現在のところ〈抓乩〉から神となった数少ない事例である。

田中將軍と類似した事例としては嘉義地区で広く信仰されている義愛公がある。その分霊廟は、嘉義県東石郷から都市へ移住した人々が建てたもので、嘉義市内にあるものが多いが、新北市新莊など、その他の地域に建立されているケースもある。義愛公は生前東石郷嘉義副瀨に勤務していた現場の警官で、人々の福祉のために争ったため長官より訓斥を受け、そのせいで自殺殉職した。死後間もなく夢に現れるようになり、地域住民が功を讃え徳に報いるため祀った。義愛

公は神となったのちに〈乩童〉を用いるようになり、〈乩童〉は元々村の廟にて村人のために力を尽くしており、また義愛公は生前より副瀬集落との関係が密接不可分であったので、村落神となっている。しかし田中將軍は同じように〈乩童〉を用い、さらに〈乩童〉によって神となっているが、もし石宮主が〈乩身〉(依り代)となっていなければ、田中將軍は神となることはなかった。そのため田中將軍と彼の〈乩童〉との関係は切り離すことはできない。筆者の研究経験に照らしてみると、通常神が〈抓乩〉しようとするなら、〈乩童〉をさせようとする特定の人物を逃がすことはないので、神は必ず〈抓乩〉することができる。ただ普通はすでに神となっている者に限られる。〈抓乩〉のとき田中將軍は神の力を持つ亡霊でしかなく²⁰、石宮主の家のなかで祭祀され、行事が開始されたことによって神明の地位を確立することに至ったのであり、そしてまさに神が神となった所以は、それを祀る人がいたからこそなのである。

神明が祀られる起源の多くの状況は由来が分からない。御神体が自ら顕れ、神の〈香火袋〉(神の香灰などが入ったお守り袋)が夜遅くに光り出すこともあれば、まず最初に〈借具〉(神霊が降霊する対象を借りるその道具や人)があり、そののち人々が神がいると考え、礼拝を開始する場合もある。様々な〈借具〉は子供が粘土で作った人形のこともある。子供がそれで遊んだ後、突然子供に異常が生じ、大人たちが問うた結果、本当に偶然からそれを拝することになる。海上に浮かぶ死体の場合もあり、そうした廟は例えば馬祖列島に実際によく見ることができる(林美容・陳緯華 2008)。また漂流する木材でも可能で、その木材で像を作り、神として祀る。〈乩童〉とは生きた〈借具〉ということもできる。すでに知られている神は廟会の最中に突然〈生童〉(チャーマン未経験者あるいは経験が非常に浅い者)を捕まえ、神威を顕わす。未知の神霊が〈抓乩〉によって神の存在を示すことが可能になり、祭祀が加えられることもある。しかしこれは非常にまれに見られる現象である。田中將軍が祭祀されるようになった事情はこのように稀なものであり、ひとりの生きた〈借具〉を、当人にとってある種の非常に説得力のある方法で捕まえて神となった。

この種の祭祀の原因は民俗としては理解することは難しくなく、よく聞かれることでもある。しかし民族的な感情から躊躇する点は、なぜ台湾人は異民族を崇拜するのかということである²¹。さらに彼は侵略者の手先であり、かつては台湾の住民を征服し、台湾を統治した植民地行政官でもあったことがあるのだ。ひとりの外来の侵略者を民衆が祭祀の対象とすることは、国家史学の立場からすれば、根本的に反逆離反であり許されないことであり、また批判と攻撃を加えられるべきものである。もし田中將軍の〈成神〉あるいは廟の建立が台湾の戒嚴令時期であったのなら、必ずこのような待遇を受けていたと想像することは可能である。しかし、田中將軍が神となったのは1988年であり、台湾ではすでに戒嚴令が解除されており、廟が建立されたのは1998年であったため、田中將軍の信仰は順調に発展した。台湾はすでに中国の威嚇を受けることはなく、総統を初めて民意で選出する時代になっていたのだ。過去に中国国民党の蔣政権による統治時期には、多くの廟の碑に刻まれた文言や聯文の日本統治期の年号はすべて抹消され、中華民国の年号に改められたのであり、そこには統治者の反日感情を見て取ることができた。過去において台湾人は党国体制が宣伝する国家史学教育の下にあり、その影響を受けていた。

台湾社会が如何にして田中將軍の信仰を生み出したのかを理解するならば、本文第3節において提起したように、信仰の生みの親である東龍宮の石宮主からすれば、彼女個人の人生においても転換の過程であり、田中將軍の代弁者にならないわけにはいかなかったが、同時に全島唯一無二の田中信仰を生み出した。宗教者の立場からすれば、彼女が田中將軍を神として受け入れることは条理に従ったということになる。しかし、なぜ台湾の一般人が一侵略者を崇拝するのかという問題についてどのように客観的に解釈できるのだろうか。これに対し、筆者は民衆史学の立場から見ることによって、この問題の呪縛を突破し、ある適切な回答を提出することが可能であると考えられる。

いわゆる民衆史学は民衆が自己の経験した過去について、民衆に属する「過去」に関する認識理解と受容を構築するものである。人類学の立場からすれば、容易に理解することができる概念として、民族植物学 (ethno-botany)、民族科学 (ethno-science)、民族意味論 (ethno-semantics) など、ethno- を冠する名詞が多数ある。これらのすべては各々の民族の様々な概念、分類体系、認知などに関するものを意味する。そのため民衆史学は民族史学 (ethno-history) に近似した一種の概念である。

ただ、国家史学と対比させるときには、民衆史学と民族史学とは分けて考える必要がある。国家史学 (national history) は、政治的に境界づけられた「国民」が共有することが期待される歴史であり、往々にして、上からの国民統合が意図され、近代以降においては学校教育などで教授される。他方、民族史学や民衆史学は、国家史学を相対化する方向性をもつ史学である点は共通する。

しかし、田中將軍を信仰する本事例では、この信仰を通して、台湾の漢民族が共有する均一な歴史認識、すなわち民族史学が構築されているわけではないし、また当事者たちもそのような歴史観を構築しようとしているわけではない。むしろ、石宮主やローカルな地域社会に生きる信徒たちは、石宮主の〈抓乩成神〉を通して手に入れた情報の断片をもとに、さらに探索を重ねることで増補された情報をプリコラージュ的につなぎ合わせており、その際には、かつての侵略者をも神として取り込み、彼の植民地行政官としての生前の事績も神の権威を補強するものとして彼らの世界観を構成する一要素に位置づけてしまうことを拒絶することもない。つまり、彼らは、国家史とも民族史とも異なる生活経験、信仰経験に基づく雑種性の台湾史を構築している。石宮主や信者たちは、国家史に追随するわけでもなく、国家に対抗する台湾漢人の立場を統合的に代表する歴史観を構築しているのでもなく、日々の経験の中でその場その場で利用できる情報を流用しつつつなぎ合わせて過去を再構成しているのである。本論で「民衆史学」と呼ぶのは、このような歴史観である²²。

石宮主は理由もなく霊媒にされ、信じない状態から信じざるを得なくなり、神の言葉に従って、史料の調査へと一歩進んだ。これはゆっくりとした長い行程であった。田中綱常が歴史上に存在した人物であることをはっきりと知ることになったのは、西暦2000年以後のことに違いない。そして田中將軍の故郷を尋ね、田中將軍の埋葬地を訪れ、子孫を探すことに尽力し、彼らに祖先が台湾で神になっていることと、ある〈乩童〉が彼の〈代言人〉をしていることを伝えた。その

うえ田中將軍信仰のおかげで、さらに進んだ日台交流を引きおこしたと言える。2014年田中綱常の4代目子孫の田中祥子とその子供が枋寮東龍宮を訪れ田中將軍に参拝し、田中の子孫たちがこれを承認したことを示した。東龍宮は田中將軍が生前に尊敬していた乃木希典(1848 - 1912)を祀っていることから、乃木は田中將軍廟の副神となっている。石宮主と息子は東京の乃木神社を訪問し、さらに長崎仁田小学校裏の佐古招魂社で現在田中將軍の部下となっている北川直征の墓を探しあてた。そこは田中綱常が生前に牡丹社事件の軍人遺骨を処理したところである。2016年3月石宮主母と北川の子孫は長崎佐古招魂社の北川直征の墓に参り、そこから彼の霊を枋寮東龍宮へと移した。これは北川家族の許可を得てのことである。さらに、日本人を神として祀る行為は、枋寮東龍宮に田中と北川の家族を引き付け、彼らが東龍宮に参拝することとなっただけでなく、インターネットとメディアの関係報道によって、廟の評判が広まり、少なからぬ日本人の関心を引き起こしており、あるいは団体であるいは個人で日本人が日本人の神を祀る台湾の有名な廟へ参拝する状況を生み出している。そういった事例は、高雄紅毛港の保安堂や台南海尾寮の飛虎將軍廟などにも見ることができる。石宮主によると台湾南部に住むある日本人が彼女の事蹟を聞きつけて接触し、彼女の伝記の執筆に協力したいと話しているという。

神はその心意の理解し、その精神や意志を貫徹する人物が神のために発言し、その声を広め、行事を行うことが必要なため、信徒と〈乩童〉を必要とする。最初に台湾の日本人神明を研究した尾原仁美は、台湾の日本神の大多数は靈媒に霊が顕れることによって出現し、決して信徒の直接の記憶からではないとする。さらに彼女は日本神の祭祀においては靈媒が非常に重要な役割を果たしていることを強調する(尾原仁美 2007: 170)。

我々は田中綱常が死後これほどの長い時間が経過した後にかなる経緯で石宮主を探し、台湾にて神となったのかについて、靈魂研究という観点からこの顛末についてさらに検討することは主旨ではない。しかし、田中將軍は台湾にある日本神のなかでは最も早い時期に台湾で活躍した人物であることは確かである。田中綱常は田中將軍になり、或いは田中元帥と称され、石宮主に廟を開き、人々を苦難から救い、教化し、台湾の民衆のために災いを治め厄を解き、願いを成就させるよう指示し、掲げさせたのが「田成正氣凜烈威靈顯赫保社稷，中有聖德神祇恩澤降世護眾生」(枋寮東龍宮の門聯)という言葉である。聯文のなかで田中の姓が最初の文字として嵌め込まれている。彼の神としての威厳、徳、恩は彼の凜然とした生氣と、国家社会のために職務を忠実に果たしているところから由来していると述べられている。その内在する徳行は、自らの霊を人々の間に降ろし、民衆の生を潤わせる。このような言語ロジックは台湾人のその他の寺廟の聯語ロジックと並べてみるとよく似ている。彼が生前守ってきた国家は日本であったかもしれないが、聯文が述べているのは彼が死後神となり、信徒はそのため神の威信を解き明かし、及びそれに対して神の徳を褒めたたえるといったことだ。田中綱常が成った神は台湾人が信奉する神と異なってはならず、信徒の奉祀を受け、信徒のために様々な世間の難しい事情を処理し、この世の福祉をもたらす。

田中綱常が神となる過程の中で最も興味深いのはもともと石宮主が無神論者であったことである。無理解と拒絶に始まり、もう少しで発狂しそうになり、最後には仕方なく受け入れた。また、

史実を追及したのち、彼が生きていた当時に起こった事柄の真相を徹底して理解し、感服の余りその子孫を探し出すことに尽力した。その結果、田中將軍の霊が彼の子孫、すなわち現在ハワイ居住の長男とフランス居住の次男の子孫と関係を繋ぎ、また田中を通して二女の子孫田中祥子とも関係を繋いだ。彼らは将来台湾に参拝に来る予定である。

石宮主本人も田中將軍を奉祀するようになったことでその人生の命運が大きく変わり、専門の神職となっている。彼女は師について道を学び、靈寶派と徐甲派の両派の師を承け、〈紅頭法師〉（赤い頭巾を被る法師で、吉事のみを扱う。台湾南部では単独で活動する）を専門としている。彼女と田中將軍の神霊は密接に通じていて、預示、預知、預見能力があり、彼女が神のために行事に尽力する際に有益であった。彼女は〈乩童〉になってから道長法師となった人物で、優秀な女性法師と成っていて、おおかた法師と自称している。〈建醮〉（厄除けや安寧祈願などの祭礼である醮を行うこと）の道教〈科儀〉を行うことも可能だが、道士のグループを形成しているわけではないので（〈建醮〉を行うためには、数人の道士が協力して行う必要がある）、ただ〈紅頭法師〉のみ行っている。道教と法派の民俗文化を伝承し、民衆のために力を尽くしている。

彼女に関してさらに言うと、彼女は個人の霊性で職能者の段階を登っただけではなく、日本神への特殊な信仰からメディアの注目を引いたことにより、その社会的声望が加わった。台日間の信仰文化交流によって、日本人のなかに台湾のシャーマニズム文化に注目をする人々が出てきている。また、筆者が彼女に日本東北地方の伝統的霊媒信仰が日に日に衰退しているという話をしたところ、彼女は学習への興味を示した。彼女は学習意欲、能力の高い人物で、田中將軍との関係から日本語も少し学んでいる。道教と法教の経文符咒や〈科儀〉を学び、これを生業とし、信徒のために力を尽くしている。

総じて言うならば、田中將軍がいなければ現在の石宮主は成り立っていない。しかしもし石宮主がこうした霊媒でなければ、田中將軍も成り立たなかったのである。また、田中將軍がなければ今日の台日信仰文化交流も成就していなかったのだ。台湾は過去に日本による植民統治を経験したが、日本の宗教文化は、仏教の各宗派ももちろん、国家神道もともに台湾社会に対して蜘蛛の糸のようなわずかな影響を残したに過ぎない。我々は日本が台湾に与えた影響を見ることはできるが、台湾が日本に与えた影響を見ることはほとんどない。田中將軍の淵源は日本であるが、台湾にて発揚し、現在では日本人が台湾人の信仰文化に目を向けるきっかけとなっている。これこそが田中將軍信仰の意義のひとつではなからうか。

本文は田中綱常の生涯からはじまり、彼の死後の〈抓乩成神〉の過程へ至った。石宮主たちは一介の市民ながら、神を探索するために史料を掘り起こし、史実を探索した。枋寮東龍宮は近い将来田中將軍資料館を建て、彼らが長年収集してきた資料を公開展示する予定であると明らかにした。民衆史学は石宮主母子についていえば、単なる学術的な理念ではなく、一步一步身近に起こった状況を調査し理解する行動である。これは特に石宮主の長男に対して言える。彼は理工系が専門の研究者であるが、田中綱常に関連する史料を追跡調査し、ひとりのアマチュア歴史研究愛好家となった。本報告は民衆史学の概念から田中綱常が神になるという新しく独創的な民俗活動やその背後を支えている民俗理念を理解しようとする試みである。田中將軍が神になった事蹟

は、幸いなことに台湾の戒厳令解除と同時期に発展してきた。戒厳令の時期であれば田中將軍が神となり、それを信仰することは、厳しく疑われ批判に遭っていたかもしれない。

田中綱常の生涯と〈成神〉年表

- 1842年 (天保13年 0歳) 11月21日鹿児島県に生まれる。旧薩摩藩士族。
- 1868年 (明治元年 26歳) 戊辰戦争に参加し旧徳川政府軍などを討伐。川村純義の部下になり、川村の後任で枢密院の顧問官となる。
- 1871年 (明治4年 29歳) 清国に留学し漢文を学習。水野遵と同じく第一期留学生となる。牡丹社事件が発生し、宮古島の漁民が殺害される。代理陸軍大尉 (副官勤務) となる。
- 1872年 (明治5年 30歳) 陸軍中尉任官。
- 1873年 (明治6年 31歳) 陸軍大尉任官。歩兵第17大隊長となり、牡丹社事件の後、全権公使福島種臣と陸軍少佐樺山資紀に随同し、視察員となる。
- 1874年 (明治7年 32歳) 2月台湾の地形実地調査に派遣され、5名を同行者として牡丹社攻撃に備える。5月陸軍少将谷干城に随同し牡丹社を征討。7月台湾蕃地事務官都督海軍中将西郷従道と台湾に渡る。10月谷干城と清国に渡り、交渉を助ける。その後交渉代表のひとり、大久保利通と台湾南部へ渡る。
- 1875年 (明治8年 33歳) 陸軍省第2局分科に任職。
- 1876年 (明治9年 34歳) 牡丹社事件 (台湾出兵) への貢献により、従軍記章を賜る。
- 1877年 (明治10年 35歳) 3月海軍少尉に任ぜられ、西南戦争に参加。仁禮海軍大佐に随い神戸出発、熊本城に常駐し、50日余り城を守り、鹿児島島の賊徒を征討する。6月有地中佐に随同し熊本総督本営庁に出向く。9月海軍中尉に、12月海軍大尉に任ぜられる。
- 1878年 (明治11年 36歳) 牡丹社事件 (台湾出兵) と西南戦争討伐によって勲五等を叙される。
- 1879年 (明治12年 37歳) 1月兵学校監学副課長に任ぜられる。2月筑波鑑乗組。12月海軍少佐に任官。
- 1880年 (明治13年 38歳) 1月海兵校監学課長に任ぜられる。5月従六位を叙される。
- 1881年 (明治14年 39歳) 長崎県下戦死者墓地改葬委員に任ぜられ、牡丹社事件の軍人軍属の遺骨を長崎に改装する処理を行い、墳墓への合葬と招魂社建築に関係する処理を行った。
- 1882年 (明治15年 40歳) 壬午軍乱 (事変) が発生し、朝鮮に向かう。後に海兵歩校教務副総理に任ぜられる。
- 1883年 (明治16年 41歳) 2月海軍中佐、4月正六位を叙される。
- 1884年 (明治17年 42歳) 臨時調査委員、海軍省会計局副長、恩給調査委員。12月調度局長。
- 1885年 (明治18年 43歳) 勲四等を叙される。また、旭日小授賞を受ける。
- 1886年 (明治19年 44歳) 兵器製造所所長、石灰調査委員。海軍大佐。
- 1889年 (明治22年 47歳) 海軍造兵廠長、技術会議委員。「金剛」員外乗組員となり、南洋諸

島巡視。従五位。大日本帝国憲法記念章を賜る。

- 1890年（明治23年 48歳）「比叡」艦長となる。「金剛」と共に和歌山県串本町大島（現在の和歌山県東牟婁郡串本町樫野）付近の海域にて遭難したトルコ軍艦エルトゥールル号の生存者69名をトルコへ送る。
- 1891年（明治24年 49歳）トルコ皇帝に召見し、勲章を受ける。6月「迅鯨」艦長。12月呉鎮守府兵器部長。
- 1892年（明治25年 50歳）勲三等、瑞宝章。
- 1893年（明治26年 51歳）6月1日正五位、海軍少将。予備隊に編入。
- 1895年（明治28年 53歳）2月18日召集。大本営附きとなり、海軍大臣西郷従道の命を受け、800余名を率いて澎湖へ向かう。3月連合艦隊司令長官海軍中將伊東祐亨の命により澎湖列島行政庁設立。3月庁長、6月台北県知事。8月31日召集を解かれる。11月従軍記章を授与される。
- 1896年（明治29年 54歳）3月旭日中綬章を授与される。4月1日台湾総督府民政局事務官。9月貴族院議員に勅任。（オスマン帝国）メディジディー第一等勲章を受ける。
- 1899年（明治32年 57歳）特旨によって一級進位、従四位に叙される。11月予備役編入。
- 1903年（明治36年 61歳）不幸にも病を患う。3月25日危篤の際、特旨により正四位に叙され、当日死去。
- 1985年（死後82年）英霊が石女士を探し出す。
- 1988年（死後85年）石宮主が枋寮の自宅にて田中將軍を祀り開壇行事を行う。東龍宮の名を得る。後に一家で基隆に移転。基隆でも田中將軍祭祀のための開壇を行う。
- 1998年（死後95年）屏東枋寮東龍宮建立。
- 2013年（死後110年）田中祥子とその子供が枋寮東龍宮にて田中將軍を参拝する。
- 2014年（死後111年）石宮主が信徒衆とともに東京青山墓地にて田中將軍を参拝する。
- 2015年（死後112年）エルトゥールル号海難事件の映画『海難1890』が日本で公開される。
- 2016年（死後113年）北川直征の魂を長崎佐古招魂社より東龍宮に連れ帰る。

上記の年表作成にあたっては、以下の資料を参照した。

1. 日本/国立国会図書館デジタルデータ/官報電子文本。http://www.dl.ndl.go.jp
2. 日本/国立公文書館アジア歴史資料センター/田中綱常公文原書。http://www.jacar.go.jp
3. 海軍歴史保存会編（1995）『日本海軍史』、(財)海軍歴史保存会。
4. 東亜同文会編（1968）『対支回顧録（下巻）』、原書房。
5. 屏東枋寮東龍宮編（n.d.）「田中綱常將軍簡介」屏東県枋寮郷：屏東枋寮東龍宮
6. 屏東枋寮東龍宮内田中將軍沿革由來碑文。

注

- 1 本論では、中国語ないしは閩南語でのみ通用する用語やフォークタームについては〈 〉書きとする。ただし、神の名称については、煩雑になるので省略する。
- 2 〈正神〉と〈陰神〉の区別は陽と陰の区別である。天界にある神は〈正神〉で多くは生前に国家あるいは人々に功があった人で、死後に正神となる。〈陰神〉には土地公、地基主、城隍爺などの地の神を含む。また、百姓公、有応公、大衆爺、大墓公など異常死の死体を集めて祭祀したものも含まれる(林美容 1994: 59-60)。
- 3 ただ台湾で死亡して神となり、台湾人から神として信奉されている神をその出自のいかんにかかわらず「台湾神」とする研究者も台湾にはいる(閩維彪 2006)。
- 4 後述するように、田中將軍の場合には、既に神である靈魂(例えば媽祖)が、特定の間を靈媒にするのではなく、靈媒を獲得することで、神として初めて顕在化した、という事例でもある。なお、いわゆる「日本神」の概要については、(三尾 2017)を参照。
- 5 本文とともに、本稿末の「田中綱常の生涯と〈成神〉年表」を併せて参照されたい。
- 6 水野遵は日本尾張(現在の愛知県)人である。1895年5月21日に公使兼台湾総督府民政局長官となる。同年8月6日民政局長官から民政局長に改称。1896年4月1日台湾総督府初代民政局長官。1896年11月4日台湾総督府辞令発布。(台湾総督府官報参照、1896年11月6日出版、国史館台湾文献館 - 台湾総督府官報データベース <http://db2.lib.nccu.edu.tw/view/index.php> 2016年12月27日検索、張子文・林偉洲 2001: 38-39)
- 7 条石とは表面に文字を刻んだ墓碑で細長い角形の石である。現在長崎佐古の招魂社にはこうした石の移葬碑に刻まれた田中綱常の名をみることができる。
- 8 樺山資紀は日本帝国時代の海軍大将。1895年5月10日日本政府より初代台湾総督に任命される。翌年6月に離職。任期は1年1か月。その主要な施策は以下である: 植民地行政組織の完成、平地の郵便・通信、病院、学校の増強、山地の撫墾署の増設、食塩専売の廃止、公式度量衡の実施など(張子文・林偉洲 2001: 740-742)。
- 9 谷干城は明治時代の軍人、政治家。1874年台湾番地事務参謀に任じられた(石丸雅邦 2008)。
- 10 蜜柑色の蝙蝠は珍しいものである。そのため多くの人が洞窟を参観した。蝙蝠は石宮主と田中將軍の出会いに関する特別な意義を有している。2015年東龍宮拜亭を増設したとき、天井に蜜柑色の蝙蝠が多数描かれたのはこのため、蝙蝠が田中將軍の修行に付き従っていることを示している。
- 11 2016年5月16日の夜、石宮主から電話で、彼女が仏寺で受戒した件について再度説明があった。彼女は田中將軍から離れるために、高雄県大樹郷大津寶蓮寺へ行き、その出家法師に助けを求めた。法師は彼が陰の霊であるので、仏寺で幽冥戒を受けなければならないと話した。彼女が寺院に行った後、軍服を着た田中がたくさんの軍人を連れて寺院にくるのが見えたため、彼女は怖くて法師の後ろに隠れた。しかし法師は彼が恐れずに入ってくるのは彼が〈正神〉で高位の神であり、恐れる必要はないと話した。筆者が日本台湾学会での発表のため日本へ赴く前に、渡邊欣雄教授より書面にて頂いた意見では、渡邊教授は田中のような陰霊が〈抓乩〉をする状況は、女性の家神と同様であり、小神の分類に含まれるであろう、と説明した。筆者は田中將軍はそれと同じではないと感じている。石宮主の説明によると、田中は生前高官であり、有功有徳の人で、天皇より封を受けている。死後彼の精神は戦争や人が亡くなる度にやって来て、台湾を救うことを望んでいる。彼が生前に台湾にいた時間は短いものであったが、結局は〈父母官〉(人民を自らの子のように愛し、慈悲深い治世を行った王朝時代の地方長官)の務めを果たした。こうしたことから彼は台湾人のことを面倒を見たい人民とみている、ということである。石宮主は田中が彼女を探しにきたときにはすでに神であり、そうでなければ大きな廟を建てることはなかった、と考えている。
- 12 石宮主の比較的個人的な願望であるため、本論文に内容を記載することは差し控える。
- 13 台湾では、廟を開く前には、玉皇上帝など天の神から〈旨〉(許可)をもらい受ける必要がある。
- 14 石宮主によれば、〈鳳陽法〉と〈散毛仔法〉は少数民族に関係していて、彼女の話では〈鳳陽法〉が陰で、〈散毛仔法〉は陽であるという。報告者自身も台東で〈散毛仔法〉を扱うことのできる平埔族の女性を訪れたことがある。葉草などが代々伝えられており、石宮主も〈散毛仔法〉には葉襍が多いと語った。
- 15 戴文鋒(2014:46-47)より引用。この碑文は1998年東龍宮の左側の壁面に刻まれた。(2017年5月現在、この碑文はなくなっている。)
- 16 2017年1月23日に李光立氏からEメールがあったが、そこで彼は次のように説明した。彼の説明では、以前は彼の父母は田中將軍の来歴について探し出せず、非常に疑っていた。時機が熟するに到ると、將軍の境遇や背景がやっと明らかになり、「田中綱常」と「田中滬都」は同一人物で、「滬都」は軍務を執行のための変名であることがわかった。軍事情報の工作人員に変名があったことは、理解可能な事情である。碑文に記述さ

れた事蹟は田中綱常の事蹟と符合しているが、田中が誰であるのか判明しない時期にすでに大体の彼の事蹟が分かっており、この碑文は神諭による部分が大きいと見ることができる。戴文鋒が2000年に石宮主を訪問したが、当時の石宮主の説明では、田中が彼女の夢に現れるときには通訳者を伴っていて、その通訳者が田中滬都と呼んだということである。しかし戴文鋒は史籍を調査したが、田中滬都が誰であるかを考察することは難しいと述べた。2000年に至るまでは田中綱常の名前は現在の東龍宮には出現していなかったといえる。

- 17 石宮主の話では、田中將軍は生前軍艦を操縦し、軍務を行った。現在は神となったので、神艦を用いている。内部には天の兵士、天の将校があり、世を救うために用いている。彼女は今後費用を用意したら日本式の神艦を作りたいと希望を示した。
- 18 〈刈鬮〉儀式中、信徒は身代わりに巻き付けた白黒の木綿糸を手を持ち、法師は片手に師刀、もう片方に銅銭と白黒の木綿糸のもう片方の端を持つ。法師は銅銭を叩きながら呪語を念じ、念じ終わったら白黒の木綿糸を断ち切る。信徒はその身代わりに一息かけた後、それを燃やすことで〈刈鬮〉儀式は完了する。儀式の中で白黒の木綿糸を切るのは厄運を切り離すことを表し、身代わりに息を吹きかけるのはよくないものをそれに移すことを表している。もし本人がその場に來ることができなければ、家族のものが代わりに名前を言うてから息をかければ〈刈鬮〉儀式の進行は可能である（2016年2月3日、東龍宮基隆分堂調査）。
- 19 〈族群泯滅〉の〈族群〉は、ここでは日本語では「民族」にあたり、〈泯滅〉とは「痕跡が消えてなくなる」という意味である。本節で論じるように、田中は、日本人でありながら、台湾で神となることによって、かつての支配者としての日本人であったということが、人々の信仰を阻害する要因ではなくなっている、ということを示している。
- 20 但し石宮主の話によると、田中將軍が彼女を探しに來た時には、すでに神であったという。これは筆者が彼女を訪れ話をしているなかで彼女に確認したことである。
- 21 日本台湾学会学術大会にて発表し、渡邊教授が拙文にコメントされた際、「他神教」の概念とその研究価値について提言された。確かに台湾における日本神の崇拜は、「他神信仰」概念の範疇から研究することは可能である。他民族の神靈を崇拜することは多くの民族に見られることであり、また他民族の人物を以て崇拜の対象とすることもある。台湾の廟では日本神の崇拜のみでなく、他にもオランダ人の八寶公主（墾丁）、インド由来の釈迦牟尼仏（花蓮光復と瑞穂）を崇拜するものもある。マレーシア華人は土着の拿督公を拝み、日本にも元来は韓国人である酒神を崇拜する神社がある（京都嵐山松尾大社）。
- 22 日本では、「民衆史」について長らく議論がある。日本民俗学においては、柳田民俗学の「民衆史」の視点は、「国家史」「官学史」によって阻害された民間の人々、常民の歴史を救い上げてきた。「日本史学」では、民衆をマルクス主義的な歴史観から定義づけることについて論争がなされてきた。しかし、1960年代以降になると、例えば安丸良夫は、「通俗道徳」論において、生活意識の場では、人々は複雑な葛藤をへながら単純に進歩的でも反動的でもない生き方を設定して生きていくものであると主張している（安丸 1996:96）。『国史』に対抗する民衆の歴史像という図式には、研究者が定位する視線によって「民衆」像を作り上げてしまいがちである。しかし、子安宣邦が近代日本における「民衆宗教」について論じているように、宗教教団の教説は、国家的な教説と抗争し、これと摩擦を生じつつ、しかし相互に浸透しながら形成されるものとして見るべきだろう（子安 1992:112）。本稿における田中將軍を信仰する人々は、信仰対象が日本人侵略者、のちには短期間とはいえ、行政官として実際に台湾を統治した支配者であったことを見出していく。彼らは、ナショナルな歴史観を学校教育の中で受けつつも、信仰対象にナショナリズム的な対抗心、排除意識を生み出していくのではなく、民間信仰の枠組みに沿いながらかつての異民族支配者すらも彼らの日常的な信仰行為の中に位置づけて理解し、国家史学とは別様な歴史認識を形成している。

参考文献

- 安藤元節編（1932）『台湾大観』日本合同通信社。
- 石丸雅邦（2008）『台湾日本時代理蕃警察』台北：国立政治大学政治学研究所博士論文。
- 閻維彪（2006）『台湾漢民間信仰の「台湾神」之研究』台北：国立台北大学民俗芸術研究所修士論文。
- 尾原仁美（2007）『台湾民間信仰裡対日本人神明的祭祀及其意義』台北：国立政治大学民族研究系所修士論文。
- 海軍歴史保存会編（1995）『日本海軍史』（財）海軍歴史保存会。
- 子安宣邦（1992）『「民衆思想」観の轉換』『思想』819、106-112頁。
- 戴文鋒（2014）『重修屏東県志－民間信仰』屏東市：屏東県政府。
- 張子文・林偉洲（2001）『台湾歴史人物小傳：明清暨日據時期』台北：國家圖書館。
- 東亞同文会編（1968）『対支回顧録（下巻）』原書房。

屏東枋寮東龍宮編 (n.d.) 「田中綱常將軍簡介」屏東枋寮鄉：枋寮東龍宮。

<http://udn.com/news/story/7314/1187288>- 取得日期：2016年3月7日。

藤崎濟之助 (1928) 『台湾全誌』東京：中文館書店。

三尾裕子 (2017) 「植民地経験、戦争経験を「飼いならす」－日本人を神に祀る信仰を事例に」『日本台湾学会報』19、14-28頁。

安丸良夫 (1996) 『〈方法〉としての思想史』校倉書房。

林美容 (1994) 「鬼的民俗学」『台湾文芸新生版』3:59-64。林美容『台湾文化與歴史的重構』所収、台北：前衛出版社、頁167-174、1998年初版二刷。

林美容、陳緯華 (2008) 「馬祖列島の浮屍立廟研究－從馬港天后宮談起」『台湾人類学刊』第6卷1号、103-130頁。

渡邊欣雄 (1991) 『漢民族の宗教』第一書房。

Jordan, C.K. (1972) *Gods, Ghosts, and Ancestors. :folk religion in a Taiwanese Village*. Berkley : University of California Press. (1985年台北敦煌書局復刻版)

(2016年10月5日投稿受理、2017年3月7日採用決定)

〔付記〕

本論文の研究と執筆の過程は、国史館台湾文献館陳文添研究員提供の文献資料、東龍宮石宮主への数回の訪問、石宮主のご子息・李光立博士提供による彼自身が収集した田中綱常関係資料、並びに本文初稿へのご意見による修正によっている。謹んで謝意を申し上げます。また、本論文は2016年5月21日に宇都宮大学にて開催された日本台湾学会第18回学術大会にて発表したものを基礎としている。コメンテーターの渡邊欣雄教授(国学院大学(当時))及び会員の方々よりご意見を頂き、本文の修正の助とした。合わせて感謝を述べる。口頭発表は林美容・劉智豪名で行ったが、調査研究には三尾裕子も参加し、論文作成にも加わった。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「台湾漢人の民間信仰から見る「記憶」と歴史の「馴致」に関する宗教人類学的研究」(課題番号：26370943 研究代表者：三尾裕子)により行われた。